

# 北海道医歌人会詠草



## カタクリ

札幌 浜島 泉

棒杭を見て訝りし庭の隅 カタクリ芽吹き妻と喜ぶ  
風に乗り雲の動くを見極めん 目をば凝らすに形崩れつ  
朝のバス運転席に弁当を包むハンカチ 妻の嗜好か  
里山に春ゼミの鳴く墓に来て草抜く 明日は義母の命日  
何ごともなく当直の朝明けつ 雨も上がりて花の香流る

## つながる命

釧路 兎玉 昌彦

母親の腹蹴り生まれた元気な娘 その元気で人生拓けよ  
幸運の辰 小さき手に握りしめ りりしき面で赤子眠れる  
みどりごよ 不思議そうなる眼も何を見ているか新しき世か  
一族の顔立ち伝う幼な子に我がDNAの未来託せり  
逝く人もあり 生れ出る子もありて 地球はゆつくり宇宙を旅ゆく

## 戦後

旭川 稲積 文子

にげた豚追う人間もまた空腹で 追いつかれなかった戦後の記憶  
はるかなる樺太の両親を想い級友は 寮の片隅で弾くムーンライトソナタ  
子育ての傍せに生き老いた今 娘にこんなにやさしくされて  
アルマーニ ブルガリなどに気が向けど残りし命がささやいている  
アルバイトでためたお金で買ったとか 孫から米寿を祝う錫盃

## 牡丹花

江別 三宅 浩次

牡丹花に誘われ来たる熊蜂がせわしく飛び交う朝日の中で  
大輪の見事さについて立ちつくす清しき朝に我存在す  
ひと時は庭一番の豪華さを誇りたるかなこの白牡丹  
隙間なく庭土埋めし牡丹花の落花の上に朝露光る  
幾年も変わることなく牡丹花は咲くも必然散るも必然

## 近況

札幌 古屋 統

三十年前前頭部打撲CT撮る脳の委縮に愕然とせし  
動き鈍り文字細小化涎多しパーキンソン病の自己診断叶ふ  
折に触れ三十一文字に詠む習慣中樞神経病みて変らず  
主治医きみ娘と大学同期生墓に入っても頭上がりませぬ  
物忘れ少きが一縷の願ひにて道医報歌壇常連を主治医に呟く

## 卒業六十五年を祝う

美根 吉村 誠治

卒寿なる体調庇ひて十二名卒業六十五年の祝いに集ふ  
二八会これが最後の挨拶と重き言葉に信念にじむ  
幾度か海外旅行も共にせし学友との友情深まり續く  
咲き誇る庭のツツジは見事なり不調の我をなぐさめくるる  
早々と田植え終えたる空知野の水田の風頬にさわやか